

【救命の連鎖 小規模版】

■ルール

基本は変わりません。今まで1チーム（およそ8~10人）でAED班と胸骨圧迫班に分かれ、1回の競技で片方の役割のみ体験していたところを途中でAED班と胸骨圧迫班を入れ替え、1人2役・2周できるようにします。これにより、少ない人数でもあっという間に決着することなく、加えて同時に両方の役・知識を定着させることができると考えました。

■結果

1回2分30秒~3分で実施することができました。実際に試してみて、最低1チーム4人、6m×6m程度のスペースがあれば、これまでと同様に十分競技として楽しめることがわかりました。

【救命の連鎖 借り物競争版】

■ルール

あらかじめ子どもたち自身で「胸骨圧迫をする役」、「担架をもらいに行く役」、「AEDを探して持ってくる役」に分かれます。また、先生や保護者など競技を見守る大人や協議サポーターである学生（あつこズ）などの学生に救急隊の役割をしてもらいます。

子どもたちにはいったん部屋の外に出てもらっている間にAEDを隠し、子どもたちが部屋に入ってきてから競技開始です。AEDを探しに行く役の子は先生にAEDの場所を聞いて取りに行きます。AEDが到着したところでAEDスイッチオン！その後、担架をもらいに行く役の人が救急隊の役の人のところに担架をもらいにきて一緒に運びます。そして、あつこを担架に乗せてゴール地点に運び、そのゴール到着までの速さを競います。

■結果

実際に借り物競争版の競技開発に取り組んだ結果、競争として競技を楽しむためには、各チームに最低限「胸骨圧迫をする役」、「担架をもらいに行く役」、「AEDを探して持ってくる役」の3人が必要であるとわかりました。

実際の現場で大人にAEDの保管場所を聞くことを想定し、先生や保護者、学生などに、救急隊の役だけでなくAEDの場所に関してヒントを出す役を担ってもらうことができればよりよくなるのではないかという意見も出ました。

工夫次第では「実際に人が倒れた場面に遭遇し、AEDを見つけて持って来なければならない状況」を体験できる競技にもなりうるということが実感できました。